SFプロ野球

四次元の白球

[illegible]正春

SFプロ野球

四次元の白球

新宮正春

講談社

四次元の白球

昭和53年 4 月25日　第1刷

定　価　820円
著　者　新宮正春
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽 2-12-21
郵便番号　112
振替番号　東京 8-3930
電話　03 (945) 1111 (大代表)
印刷所　新日本印刷株式会社
製本所　株式会社　堅 省 堂

© M. SHINGŪ　1978 Printed in Japan
落丁本，乱丁本はお取りかえいたします。
0093-241874-2253(0)　(体育)

目次

沢村が王に投げた！ 3
ルー・ブロックのグラブ 53
スーパードームの背番号90 117
二〇七八年の巨神戦 151
スイッチヒッター武蔵 191

装幀　森下年昭
本文イラスト　安岡　旦
カバー写真　後楽園球場
カバー撮影　小林　洋

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

沢村が王に投げた！

1

「ここがええわ」

監督の吉田は、両手で耳をふさぐ真似をした。一メートル六十五の中年ぶとりの軀を、ダグアウト裏の小部屋に滑りこませる。

この小部屋は、三方を分厚いコンクリートの壁に囲まれていて、スタンドからの罵声も届かない。テレビカメラの執拗なズーミングも、ここなら躱せる。

「誰のやねん？」

壁には嵌込式になったバットスイング用の大鏡があり、その縁の上にセブンスターの箱が載っている。

「タイラのでっしゃろ」

吉田の視線をたどって、コーチの新堂が云った。

藤田平にかぎらず、田淵やブリーデンもよくこの場所に自分の煙草を置いている。

試合中にはダグアウトで一服つけるわけにはいかないため、イニングの合い間にスタンドから見えないこの小部屋で喫うのがきまりになっているのだ。

「一本、貫たるか」
吉田は、片手でそのセブンスターを一本器用に振りだした。親指の腹でひょいと押え、口にくわえる。
「……せめて、火ィぐらい点けんとなあ。こう打線が湿っとったら、どないもならん」
「ほんまに……」
新堂が合槌をうち、くしゃくしゃになった紙マッチをトスした。吉田はそれを逆シングルで受けとめる。
「……えらい騒ぎになりよったですな、監督。こんなんなら、早いとこ新記録つくってもろうたほうが助かるんとちゃいますか？」
「そやなあ」
吉田は、溜息といっしょに煙草の煙を吐きだし、
「……こっちまで調子狂うてもうて、えらい損や。けどなあ、ホームラン打たれるピッチャーの身にもなったらなあかんしな」
「おのれの名ァが永久に残る……」
「うん。ピッチャーにしてみりゃ逃げ腰にもなりよるわけやねん。ワンちゃんも、選りに選ってウチとの三連戦に新記録持ちこんでくれんでもええのにな。ほんま、めぐり合わせの悪さを

怨むでェ」

吉田が嘆くのも無理はない。

王という稀有の打者が、アメリカ大リーグのハンク・アーロンと肩を並べる通算七百五十五本目のホームランを放ったのは、もう一週間も前のことだった。大洋の三浦道投手から打ったのがそれである。

以来、世界新記録達成の瞬間を狙って、アメリカのテレビ局までが特別編成の取材班を日本の球場へ送りこんできた。王が左打席に立つたびに、スタンドのファンは総立ちとなり、その興奮を煽るようにカメラマン席からは、モータードライブの連続シャッター音がひときわ激しく響くのだった。

こうなってはもう、まともに王と勝負する投手はいなくなる。きわどくコースをはずして歩かせるのはまだましなほうで、ランナーもいないのにいきなり敬遠する投手まで現われてきた。

そういう時期に、甲子園球場でこのシーズン最後の三連戦を迎える羽目になったのである。

ペナント・レースの優勝がかかっているから、王に対してそうは逃げてばかりもいられない。下手をすると、一塁側の地元ファンまで敵にまわしてしまいかねないムードだったし、第一、王に神経をすりへらした分だけほかのバッターにめった打ちにあうという割に合わぬ副産

物をうんでいた。

「そこで新堂はん、この辺で木腰入れてワンちゃんをストップする手ェを考えなあかん。あんた、妙案があったら遠慮せんと云うておくれやす」

京都弁を混えて、吉田は真顔で持ちかけた。

コーチの新堂は、以前はスカウトだった老人である。齢は六十を超えていたが、前任のピッチング・コーチがシーズン途中に家業をつぐことになったため、急遽ユニフォームを着た。

ノンプロでのキャリアはあっても、プロ選手としての成績はゼロだった。この点はかつてロッテの監督をつとめた田丸仁や、ヤクルトの田口周と共通していた。コーチぶりがきわめて明快で、若いファームの選手の面倒見もよかった。

「妙案ねえ……」

新堂は首をひねり、

「……なんやったら、この儂がほりりまひょか。儂ならワンちゃんに打たれても、痛くも痒くもおまへんしな」

「冗談いうとる場合やおまへん、新堂はん」

吉田は、怒ったように云った。試合の最中に、老人のたわごとに付合っている暇はないのだ。

「へえ」

スナップ・スローの真似をしていた新堂は、その右手を途中でとめた。左手は薄いセーム革の手袋をはめている。暑いときでも人前で脱がないのは、吉田も知っている。

儂が投げる——と云いだしたのは、しかし老人の冗談でもなかった。この齢にしては異例に属するが、老人は選手登録していて出る気なら公式戦に登板しても構わなかった。

ただ、登録といってもバッティング投手としてである。球速こそないが、カーブのコントロールが絶妙なのを重宝がられ、ほとんど毎試合、フリー・バッティングで投げていた。

球団としては人件費の節減にもなることだったし、ブリーデンやラインバックが新堂のゆるい球で調整するのを好んだため、ついずるずるとそのままになっていた。

かといって、世界的な大打者・王に対してこの老人をぶっつけたとしたら、吉田が物笑いのタネにされるだけだ。

「ファームにええのがおますやろ?」

と云う吉田に、

「へえ。まあ、それはおることはおるけど……」

新堂は、なぜか言葉尻をにごした。

吉田が誰のことを云っているのか、新堂にはわかっていたのである。同時に、吉田がそれと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

なく自分をこの小部屋に誘いこんだ狙いも、新堂にはピンときた。

遊木慎一のことだった。

背番号42。ファームで新堂が手塩にかけて育ててきた三年生で、ごく一部のウェスタン・リーグ通しか知らない、いわば秘密兵器だった。

ドラフト外の選手というのは、巨人の加藤初のように全球団のスカウトがはじめから獲得をあきらめていたか、あるいは新浦寿夫のように外国籍であった場合に限られる。

無競争で入団した遊木のケースは、この二つが混りあった特殊な例だった。遊木は台湾からの帰化選手で、元の名を游信民といった。まだ中学生だった彼の身許引受人となったのが新堂であり、東大阪のアパートではもう八年もいっしょに住んでいた。

言葉を教え、高校に通わせながら、炊事から洗濯までした。男やもめの新堂老人が、なぜ台湾の少年を実の子供のように養育するのか、だれもその理由は知らなかった。

「慎一を一軍に上げても構へんでっしゃろ？」

と、監督の吉田が念を押したのも、そういう事情があったからである。最終的には監督の権限ではあっても、ことがことでもあり、父親がわりのこの老人には前もって納得しておいてもらわないことには、吉田の気がすまなかった。

老人にとっては掌中の珠にもひとしい遊木を、あの王と対決させる。みごとに王を封じこ

めば一躍有名になるし、たとえ七百五十六本目のホームランを打たれたとしても、新人だけにそう大きなダメージは受けない、というのが吉田の読みだった。

「それに、新堂はんがついていはるんやから、あの子も心強いんとちがいまっか。どっちにせえ、一度はどこかで誰かとぶつからにゃいかんのがこの世界や。ワンちゃん封じのテクニックを、あんたからもとっくり教えてやってもろたら、案外、大成功するかも知れまへんな」

「へえ……」

生返事しながら、新堂は吉田の手から煙草の箱をとりあげた。さっき吉田がやったのとそっくり同じ手順で一本の煙草を振りだして口にくわえ、

「……成功するとしたら、一つだけ手ェがおますな」

と云った。

新堂の秘策を聞いた吉田の目が、ぱっと輝いた。

2

第一戦の試合中に、新堂は行動を起した。

まず用具係をダグアウトの片隅に呼び、ひそひそと耳打ちした。

「えっ？　そんな……」
用具係は、びっくりしたように聞き返し、
「……そりゃまあ、出入りの運動具屋はんに注文しときますけど、いったいそんなもん誰が使いますんや」
「それはまだ秘密や」
「殺生やなあ。明日の第二戦までには間に合わせろ、と云うといて、誰が使うか教えてくれんのやもんなあ」
「まあ、明日になればわかるんやから、ええやないか」
「けど、新堂さん。ウチにそんなピッチャーはおますかいな？」
「ちゃんとおるからこそ、こうしておまはんに頼んどるやないか」
「ふーん、いったいどこにおるんやろ？」
用具係は、わざとらしく小手をかざしてダグアウトに居並ぶ自軍の投手たちの顔を見比べた。
新堂は、奇妙な注文を出していた。
右利き用と左利き用のグラブを一個ずつ捜してきて、それを合体して左右両用の新しいグラブに改造してほしいという注文である。

中指を中心とした三本はそのままで、あとの親指と小指が入る部分を切落し、新たに別のグラブから切取ってきた親指を、小指のところに縫いつける。元の親指は、やや上方に付替えて、小指を差し込んでもプレーに支障がないように幅もいくらか太めにするわけだ。

「怪態(けったい)な注文やなあ」

用具係は、ぶつくさ云いながらも地下道を通ってロッカールームのほうへ駆けだしていった。

左右両投げのスイッチ・ピッチャーは、プロ野球では過去に一人だけいた。昭和三十九年から二年間、巨人に在籍した秋田商出身の吉成昭三である。東京六大学の明大には、柿本孝哉というバッティングもスイッチできる、一人四役の器用な選手がいるのは、用具係もスポーツ新聞で読んだ覚えがあった。右でも左でも投げられ、おまけに打つのも両刀使いという重宝な存在である。ただ、器用貧乏というのか、巨人で59番の背番号をつけていた吉成の場合は、ついに公式戦に登板することなく、プロから足を洗った。

「ウチにそんなピッチャーおるんやろか?」

ファームにいる若手の顔を思いうかべて、用具係はしきりに首をひねった。

「遊木にしても右やしなあ……」

減法スピードがあるという評判の遊木は、オーバーハンドの本格派だったが、左でも投げら

れるなんて聞いたこともない。
それでも、コーチの新堂がこんなことで人を担ぐとも思えない。用具係は、球団出入りの運動具屋をつかまえると、スコアブックの余白に新堂から頼まれた通りに変型グラブのイラストを描いて説明をはじめた。

その夜――。
東大阪の二間きりのアパートに帰った新堂は、管理人に断わってモルタル塗りの廊下のところどころに白いチョークで印をつけた。
手に巻尺をもっている。
それでバッテリー間の距離を測り、ホームプレートの幅に白線を引く。
「どないするつもりです？」
これから寝ようとする矢先を叩き起された遊木は、とがった声で訊いた。
「練習やがな」
新堂は、なにを云うかという顔で、
「慎一、部屋に戻ってシーツ持ってきてくれへんか」
「シーツ？」

「うん。なるべくきれいな奴を持ってくるんやで」
遊木がパジャマの胸許をぼりぼり掻きながら、部屋に戻ってゆくのに、
「……それから、球団で借りた映写機が押入にはいっとるやろ。それも持ってきてや」
なおも念入りにチョークで印をつけつつ、新堂は付け加えた。
遊木が運んできた映写機を廊下の中ほどに据えつけて、新堂はうれしそうに揉み手をした。
「……よっしゃ。慎一、これからピッチングの練習や。儂が受けたるさかい、思い切ってほうってみい」
近ごろはどの球団も科学づいてきて、例えば広島や日本ハムのようにスピード測定機まで使うところまで現われている。これは高速で移動する物体を光波で捉えると、16ミリ・カメラのような測定機に数値が出てくるもので、元来はアメリカのハイウェイ・パトロールが使っていたものだという。
新堂が借りている映写機は、もう十年以上もミーティングで大リーガーのバッティングやピッチングのフォームを映すためにも使われてきた。今は王の一本足打法を正面から撮影した8ミリ・フィルムをセットしたまま押入に眠っている。
「コードは足りるかいな」
「こんなとこでやるの？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com